

高等学校サッカー部の競技力と指導者行動の関係について

関 朋昭*・中島 広基**・川上 光博***・宇留間 昂****

On the relation between team performance of high school soccer clubs
and the leader's behavior

Tomoaki SEKI,Hiroki NAKAJIMA,Mitsuhiro KAWAKAMI,Takashi URUMA

Abstract

The aim of this study is to grasp the behavior of the soccer club leaders in high schools and to clear the relation with the team performance. As a result of statistics, the direct factor "coating" and the indirect factors "study・science" and "outside school・interchange" and extracted as important connections with the team performance. It is necessary to structure the manager's behavior on the basis of the analysis of this study.

1 目 的

競技スポーツの場合、指導者のマネジメント能力が大きく影響を及ぼす。特に学校教育下での運動部活動(以下部活動とする)においては、T.M.(top management)である学校長より、実質的な指導者であるL.M.(low management)である顧問、いわゆる指導者の活動方針が競技力に大きく影響している。従来の競技力向上を目指した指導者研究においては、選手に対する働きかけであるリーダーシップを論じているものが多く、マネジメント能力を対象にした調査・研究は少ない。指導者の役割として、重要であると考えられるマネジメント能力を明らかにすることにより、競技力向上を目指したチームづくりが可能であると推察される。

そこで本研究では、高等学校サッカー部の指導者行動を把握するとともに、競技力との関係を明確にすることを目的とした。

2 方 法

- (1) 調査対象
調査対象者は、平成11年度全国高等学校総合体育大会北海道大会に出場の28校の指導者を対象とした。
- (2) 調査期間
平成11年 6 月 9 日から 6 月30日
- (3) 回収率
全28校中27校回収 (96.4%)
- (4) 調査方法
北海道高等学校体育連盟のサッカー専門委員を通して配布してもらい、郵送にて回収した。
- (5) 調査内容
調査項目の作成には、清水ら¹⁾の先行研究を基に加筆修正したものを作成した。主に指導者の働きかけについて44項目設定した。回答については、「大変実行している」、「まあまあ実行している」、「どちらともいえない」、「あまり実行していない」、「全く実行していない」の5段階尺度とした。

* 講 師 一般教科
** 助教授 一般教科
*** 技 官 (技術専門職員・一般教科)
**** 教 授 北海道教育大学冬季スポーツ
教育研究センター

3 結果と考察

3.1 指導者の指導者行動について

指導者の指導者行動を精選するため、調査項目に対して主成分分析を施した。さらに、固有値1.0以上の主成分に対し、Normal varimax基準によ

表1 回転後の構造因子と負荷量

因 子	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	α 係数
適切な目標(チーム、個人)、夢、役割を持たせている	0.859	-0.042	0.017	0.9495
試合時の戦略・戦術を考えて練習している	0.858	-0.103	0.126	
モチベーションを高める指導をしている	0.828	0.074	-0.026	
選手の理解度に応じて指導に柔軟性を持たせている	0.804	0.009	0.105	
選手との雰囲気や意思の疎通を図っている	0.803	0.042	-0.220	
試合へ向けたコンディションづくりをしている	0.747	-0.018	0.209	
選手個人の試合での結果反省を練習計画で見直している	0.745	-0.075	0.187	
個性を伸ばす練習を採用している	0.741	0.165	-0.105	
参加意識、集団意識をもたせチームを形成している	0.740	0.135	-0.086	
選手の性格特徴を理解している	0.740	0.101	0.015	
計画－実行－反省－計画のリサイクルを実施している	0.661	0.022	0.296	
選手とのミーティングや懇親会など開いている	0.635	0.191	-0.028	
集中力をつけさせることを指導している	0.158	0.889	-0.275	0.8932
選手をリラックスさせるための練習ほうを取り入れている	0.150	0.820	-0.037	
能力テストなどのデータを選手に伝えている	0.033	0.811	-0.016	
化学的理論を指導法に活用している	0.205	0.733	-0.109	
研究者(スポーツ心理学等)との交流を行っている	-0.310	0.713	0.560	
選手のコンディションのためのメンタルトレーニングを取り入れている	0.118	0.595	0.138	
選手に練習日誌等を記録させ、それを活用している	-0.090	0.509	0.277	
有望な選手を含めJr.ユースの選手に対してのリクルート	-0.018	-0.059	0.972	0.8797
スポーツドクターやトレーナーとの交流を行っている	-0.170	0.184	0.860	
合宿や合同練習会などの計画や開催を行っている	0.331	-0.127	0.698	
中体連など中学生の大会はよく見に行く	0.049	0.157	0.696	
練習試合、公式試合など管外によく行く	0.170	-0.244	0.668	
固有値	11.83	2.45	1.99	
累積寄与率	49.31	59.53	67.81	

る直交回転を行い、因子を抽出した。累積寄与率60%を超える基準および主成分の明確性として3つの主成分が抽出された(表1)。

第1因子では固有値11.83となり、これは全分散の49.31%を説明したことになる。さらに、こ

れら12項目について α 係数を算出した結果、0.9495となった。これらの結果から、12項目については信頼性が高いとみなされる。項目内容を要約すると、直接選手に対する働きかけに関する内容から、「コーティング」とした(尺度の平均

値45.70、標準偏差8.95)。

同様に、第2因子では固有値2.45、 α 係数0.8932となった。統計的な信頼性が高く、項目内容から「研究・科学」とした(尺度の平均値18.78;標準偏差6.16)。

第3因子では、固有値1.99、 α 係数0.8797となった。項目内容から「対外・交流」とした(尺度の平均値14.37;標準偏差5.40)。

3.2 高等学校サッカー部の競技力について

学校教育を対象に、競技力を明確化・数値化することは難しい。高等学校のサッカー競技においても同様である。競技力の数量化については、競技成績のみに着目するのではなく、地区レベルと各校の競技力を総合的に分析する必要がある。本研究においても関ら²⁾の算出方法を採用し、各校の競技力とした(表2)。

3.3 競技力と指導者行動の関係について

競技力と指導者行動の関係の検証は、経営者行動の3因子ごとに、その因子得点と競技力4分類間の平均値の群間差を一元配置分散分析と多重比較(LSD法を用い、有意水準は危険率5%)を用い分析した。

表3は、競技力と指導者行動の関係を分析した結果である。その結果、「対外・交流」について、群間差に有意水準が認められた。統計的な差が認められないものの「コーティング」に関しても高い値がみられた。

この分析結果から、競技力に最も影響を与える指導者行動として、リクルート等の対人への働きかけが重要であると推察できる。中学校、ジュニアユースクラブチーム、サッカー協会等の関連団体への関わり、すなわち人脈が競技力を推進するものと推察できる。

表4は、競技力と指導者行動の各因子得点と

表2 各校の競技力の分類

地区	学校	l.p.	t.p.	t.i.	rank
室蘭	私・	5	16	21	A
札幌	私・	5	15	20	
室蘭	私・	5	11	16	
札幌	私・	5	10	15	
函館	私・	4	10	14	
函館	公・	4	7	11	B
千歳	私・	3	6	9	
札幌	私・	5	3	8	
旭川	私・	2	6	8	
小樽	公・	1	6	7	
帯広	私・	1	6	7	C
札幌	公・	5	1	6	
函館	私・	4	2	6	
南空知	公・	2	3	5	
北空知	公・	1	4	5	
北空知	公・	1	4	5	
北見	公・	1	4	5	
名寄	公・	1	4	5	
釧路	公・	2	3	5	
苫小牧	私・	1	3	4	
小樽	公・	1	3	4	D
旭川	公・	2	1	3	
南空知	公・	2	1	3	
北見	公・	1	2	3	
名寄	公・	1	2	3	
帯広	公・	1	1	2	
帯広	公・	1	1	2	

注1) t.i. の分類
A : 北海道上位レベル
B : 北海道中位レベル
C : 北海道下位レベル
D : 地区上位レベル
注2) l.p. : local point
t.p. : team point
注3) この表は、関ら²⁾の算出方法を用いた。

表3 競技力と指導者行動の関係

	全 国	全道上位	全 道	地 区	F 値
コーティング	47.70	50.50	47.50	37.83	2.493
研究・化学	18.60	22.00	18.92	16.50	0.613
対外・交流	19.20	16.25	13.58	10.67	3.143**

**p<.05

表 4 競技力と指導者行動の因子得点の比較

	A 全 国	B 全道上位	C 全 道	D 地 区	ANOVA	多重比較
コーティング	3.92	4.21	3.96	3.15	*	B>D, C>D
研究・化学	2.66	3.14	2.70	2.36		
対外・交流	3.84	3.25	2.72	2.13	**, *	A>D, B>D

*p<.05 **p<.01

の比較結果である。多重比較の結果、「コーティング」、「対外・交流」の2因子について統計的な差が認められた。特に、「対外・交流」についてはA rankとD rank間に顕著な差がみられた。

「コーティング」では、下位群のD rankとC rank間に差がみられた。この結果から北海道大会の常連校（C rank）と地区大会の上位校（D rank）では、指導者の直接的な働きかけである指導法が競技力に大きく影響を与えるものと推察できる。従って、地区大会から北海道大会を目標にする場合は、指導者のコーティング力が重要であるといえる。

「対外・交流」では、上位群のA rankおよびB rankと下位群D rank間にそれぞれ有意な差が認められた。この結果、競技力を高めるためには各方面への人的交流が求められる。

「研究・科学」については、有意な差が認められなかった。経営資源の一つである「情報」の収集が今後、各カテゴリーにおいて重要な課題と考えられる。スポーツの高度化から情報が溢れている昨今、質の高い情報を、いかに整理し活用するかが、今後の競技力向上の重要な位置づけになるといえる。

部活動の経営資源を加えた新たな経営者行動の構造化が必要である。

引用・参考文献

1) 清水富弘、田井村明博、洲雅明；競泳指導者の管理行動と選手の競技成績、日本体育・スポーツ経営学会第19回プログラム、PP29-30、1996

2) 関朋昭、中島広基、宇留間昂；競技力向上をめぐる高等学校サッカー部のマネジメントについて、苫小牧工業高等専門学校紀要、第35号、PP159-164、2000

3) 清水紀宏；スポーツ経営学における基本価値の検討、体育・スポーツ経営学研究、第13号、PP1-15、1997

4) 武隈晃；管理者行動論によるスポーツ組織の検討、体育学研究、第40巻、PP234-247、1995

5) 佐藤正伸；運動部活動の指導における組織行動構造の活用に関する基礎的検討、体育・スポーツ経営学研究、第15号、PP17-24、1999

(平成12年11月21日受理)

4 まとめ

競技力向上を考えた場合、指導者の指導者行動を明確にすることが必要であると考えた。その結果、指導者行動の分類として直接的（対内的）働きかけである「コーティング」、間接的（対外的）働きかけである「研究・科学」、「対外・交流」の3因子を抽出した。そして競技力との関係については、「対外・交流」の働きかけが最も関連性が強いものであった。

今後は、本研究の指導者行動の分析をもとに、